

029.
191
1

一一
馬
計



027
191
1

柳時雨

伊勢 春波著



享保十三年刊



序



款人乃家ある本の合意うて
去年夏林翁入ゆきよ薄り
多かれない事は捨てて書は一束
とくうちまとこくせん牛の字
りあいやうへんがほくへん其
ま似すに又うのねふ

アサヒと我事乃件 事事とて家方
レニシのセイ トモ

成
申
十
月
日

景行焉

遙

赤い夷辰何く あらゆ志之れ

麥林

名田と甚々と 狙炮乃所 吹家
薦門乃寧身。終本を蒙也。春波
京の白ひ乃子を深矣 陸之
双六の毛目をやどり二七の月
雅と揚ては望月の初秋 雨鶴
不化寮の下たり是揚もまじ
李江
景空はかく字作の川音

圓石

爰す。吾は嘗て乃立場は夜の

南畠

大名下ノア等も室へ

加濃

衣張の事も小琴北門也

珍舍

之も去く十月の移

菊二

伊家浦乃庵にこよひゆう

東里

西を良とす。今翁の宿

社谷

窓ノ花中一枝、筆人御

温故

食ふ。桶りせう華

曰圖

月夜波平豈か満てぬ波王波女

辰秋

けふうれく未底ちぬ福

草文

物事ノ出見せ乃遊入どり

家

飯喰ふとくらむもの御

波

惟子をかくらに終を

之

女房叶伊達ハ松の波川

小

菊の月乃楊貴妃の名作也

江鷗

端根乃瀧も此と因とは無い
後は峯ノ山の日後には
今之乃系の筆ミスりより所
經を在リ市て次立
ちるや鶴日と宮井陣高り
松橋がどく伊豆の道
一家のて用ひ辟よ満願寺
五島の瀧へきて是も

石畠濃倉二室谷故

異教日と激殊の如其年を起て
かくくくとする系掛
道のりへ多居の起て是れ眞
古ハ千人よみの異行

支
林

中の事と暮れ子供の物語ふ

乙未

多々もむらのあれどもこれ

日當

蝶の舞未だまほくとて

東里

鶴乃鳥と浮ふ雅波の物語ふ

春波

葉の香れ陽は薄すやうに

落印酒井

アホうらに河を廻るの葉の山

珍合

かずなを考ふアホうらの山

吟翁

町中小納乃ちぢりもうへと

寒川

大小の顛呑廻せばうへと

温故

このたとえの跡あらわす

闇衣

呑柱も瘦て面白一物しれ

第二

猪いとく膳せんとく膳を

杜谷

月絃の手も合ひり和音の

陸之

網とせんとく膳をや十とくと

加濃

弓張の角を張てはぬぐり

李昌

うひよの木種うちれり

西端

ガアリヒトスセヒシホウナリ候

葦

彦ひをと候うり行候る

春浦

ホドリム新ホモホムヒ

可盛

山細の人と云ひ候ふ

麥後

桶帰結の中を候すや物

草

辻彌ナリモケリ候く候めり

秋分

ニ子山御ひ候うり候く時めり

苦女

夕歌乃名山主ひりかみく候

杜

老僧ハ山のぢらしくもまほり

白毫

墨池や沙翁乃候く事せど

柏枝

候承は葉ひをもれぬこまご

名由

山姓乃掃除の候ふーと竹下

春蕙

鶴禪も瘦していわ季のゆき

立竹

鳥居／＼鷗もくそくもひめ

佳玉

然て仮名の候を候ふ等すなり

菖蒲

了解老乃吉信日をもてて時局のよ
茶の紅玉陳年茶より秋一月
種子ノテ原ノ生葉も窓内御用
毛豆や豆と豆の豆と保仕
集合の農工商一ノ道なり

福引
昨那
座來
残支
底秋

京守町押小路上
橋屋治吉本板

